早稲田大学大学院日本語教育研究科

修　士　論　文　概　要　書

論　文　題　目

韓国人日本語学習者の感謝の表現に関する韻律上の工夫と日本語母語話者の聴覚印象
-「ありがとうございます」を一例として-

趙　允彬

２０２５年　３月

修士論文概要書

本研究は、感謝の表現「ありがとうございます」を一例とし、感謝の気持ちを伝達するための韓国人日本語学習者（以下、韓国人学習者）の音声上のストラテジー（以下、工夫）を日本語母語話者（以下、日本語話者）の音声を参考としながら把握し、韓国人学習者の発話に対する日本語話者の聴覚印象を明らかにした。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

第１章　序論

第１章では、本研究の研究背景、研究目的、研究課題（以下、RQ）３つについて述べた。筆者は感謝の気持ちを伝える場面をはじめ、日常から様々な場面で相手に通じるだろうと思った筆者自身なりの音声の工夫が、日本語話者に伝えたい気持ちを表現するにはずれている場合が数多くあった。しかし、筆者の経験としては、自身の感情を伝える際は、韻律的なものをどのように調整すれば効果的に伝達できるかについての日本語教育は受けたことがない。そこから感情表現の教育の必要性を感じ、ある特定の言語形式を発する際に、どの韻律的要素をどのように工夫すれば自身の気持ちが伝わるのかについて考察したいと思った。音声コミュニケーションの構成要素として、言語情報、非言語情報、パラ言語情報の３つが挙げられており（Fujisaki（1997)、前川・北川（2002))、その中でもパラ言語情報は、話し手の発話意図が反映されるものである。本論では、感謝の表現「ありがとうございます」に着目してパラ言語の分析を行う。

研究目的：韓国人学習者と日本語話者が感謝の表現「ありがとうございます」をどのような音声上の工夫をして発話しているのかを調査した上で、日本語話者に感謝の気持ちが上手く伝わったものや伝わらなかったものはどのような韻律的特徴を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

RQ1：日本語で「ありがとうございます」と感謝を伝えるとき、韓国人学習者と日本語話者はどのような音声上の工夫をしているか。

RQ2：日本語話者は韓国人学習者が発音した感謝の表現に対してどのように印象を評価するのか。

RQ3：RQ2 で評価者に上手く伝わった発話者の工夫と伝わらなかった工夫はどのような特徴を持っているのか。

第 2 章　先行研究

第 2 章では、まず日本語教育における音声コミュニケーションの動向について述べた。次に、学習者自身の伝えたい気持ちをパラ言語と感情表現、感謝の表現と丁寧さの先行研究について述べた。先行研究により、近年パラ言語情報を用いた感情表現の研究は盛んになっていることが分かった。

それに加え、パラ言語情報における感情表現は、日本語話者の認識と日本語学習者の認識が異なる様相が見られた。これにより、日本語音声コミュニケーションにおけるパラ言語情報に関する教育・学習は、学習者自身の感情をより効果的に伝えるための重要なものだと言える。一方、感謝の表現「ありがとうございます」に関する韻律的特徴の研究は十分にされていないのが現状であり、本研究で明らかにしたい。最後に、日本語学習者の音声に対する日本語話者の聴覚印象の先行研究を通し、本研究での日本語話者の聴覚印象調査の方向性について簡略に述べた。

第 3 章　韓国人日本語学習者と日本語母語話者による感謝の表現「ありがとうございます」の音声

第 3 章では、RQ1 に答えるために実施した調査 1 について述べ、調査 1 の結果を韓国人学習者と日本語話者が行った音声上の工夫を各発話者の発話ごとに記述した。また、必要に応じて音声分析ソフトウェア Praat（以下、Praat）による音響分析の結果を示した。調査 1 は、韓国人学習者と日本語話者は提示された場面において感謝の表現「ありがとうございます」をどのように発話し、音声でどのような工夫を行っているのかを明らかにすることを目的としていた。発話者は、韓国人学習者 3 名（KS1、KS2、KS3）と日本語話者 3 名（JS1、JS2、JS3）であり、20 代～30 代前半の女性に限った。本研究での場面は、発話者は大学の後輩の立場になって、宅配便でプレゼントをもらう程度の親しい大学の先輩に感謝の表現「ありがとうございます」を発話する場面である。この場面に基づき、感謝の気持ちの度合いが異なる、3 つの発話（3 段階）を録音し収集した。具体的には、場面に基づく発話（1 回目；発話 A）の後、「もっと感謝の気持ちを込めて」との指示にての発話（2 回目；発話 B)、「もっともっと感謝の気持ちを込めて」との指示にての発話（3 回目；発話 C）というように、1 人の発話者において 3

つの発話を録音し収集した。その後、発話者にアンケート用紙を配布し、音声を自由に再生しながら3つのそれぞれの発話で感謝をどの程度で表現したのかについて数字で選択するようにした。また、なぜ該当の数字を選択したのかについて自由に記述してもらった。次に、アンケート調査を基に半構造化インタビューを実施した。半構造化インタビューで調査者が準備した質問項目は「声の高さ」「話速」「声の大きさ」をどのように調整したのかというものである。発話者の回答に疑問点があった場合は、さらに質問をし、コメントを収集した。

第4章　韓国人日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の聴覚印象

第4章では、RQ2に答えるために実施した調査2について述べ、調査2の結果を発話ごとに記述した。また、必要に応じてPraatによる音響分析の結果を示した。

調査2は、提示された場面での韓国人学習者の日本語の発話に対し、日本語話者はどのような聴覚印象を持つのかを明らかにすることを目的とし、調査1で取った韓国人学習者の音声データに対してアンケート調査とフォローアップインタビューを実施した。評価者は、音声についての専門的な知識がない一般の日本語話者3名（JE1、JE2、JE3）で、外国人との接触度合いが少ない20代～30代前半の女性に調査に協力してもらった。

調査手順は、まず日本語話者に韓国人学習者の発話の音声データをランダムに3回ずつ（評価者ごとに異なる順番）聞かせ、アンケート用紙に感じられた感謝の度合いを5段階のスケールから選択してもらい、どのような点で該当の番号を選択したのかについても記載してもらった。また、直感的な聴覚印象を得るために、一度評価を行った録音音声に対しては、再び戻って評価を修正できないように設定した。次に、アンケート用紙を基にし、フォローアップインタビューを行った。

第5章　考察

第5章では、調査1と調査2の結果に基づきRQ1、RQ2、RQ3の観点から総合的考察を行った。

RQ1より、韓国人学習者と日本語話者の音声上の工夫を項目別にまとめた。

韓国人学習者は、「声の高さ」「話速」「声の大きさ」「イントネーション」「ポーズ」の5項目で工夫を行った。

1)「声の高さ」を高くする（KS1、KS2、KS3）、2)「話速」を遅くする（KS1、KS3）、3)「声

の大きさ」を大きくする（KS1、KS2)、「声の大きさ」を小さくする（KS3)、4)「イントネーション」の幅を大きくする（KS1)、5)「ポーズ」を「ありがとう」と「ございます」の間に置く（KS1)

一方で、日本語話者は「声の高さ」「話速」「声の大きさ」「イントネーション」「『す』の有声化および延伸」の5項目で工夫を行った。

1)「声の高さ」を高くする（JS1、JS2、JS3)、2)「話速」を速くする（JS1、JS2)、3)「声の大きさ」を大きくする（JS1、JS2、JS3)、4)「イントネーション」の高低に変化を入れる（JS2、JS3)、5)「『す』の有声化および延伸」（JS2、JS3)

RQ2より、以下の6点がまとめられた。

1)「声の高さ」が高い方が感謝の気持ちがより伝わる。しかし、声の高さにも許容範囲が存在し、範囲を超えたと判断される高い声だと、感謝の気持ちの伝達を妨げる要因となる。

2)「話速」が速い方が感謝の気持ちが効果的に伝わる。話速が遅いと、感謝の気持ちが伝わりにくい。しかし、話速があまりにも速い場合は、感謝の気持ちが感じられない。

3)「声の大きさ」が大きい方がより感謝の気持ちが伝わる。声の大きさが小さいと、感謝の気持ちが伝わらない。

4)「イントネーション」の高低が平坦であると、感謝の気持ちが伝わらず、抑揚がないことにより、AI、ロボット、機械のような印象を与える可能性がある。また、「ありがとう」と「ございます」が分けられたイントネーションになると、聞き手のことを怯えているような印象を与え、感謝の気持ちが伝わらない。

5)「ありがとうございます」の「ます」を「まーす」と伸ばして発話することに関して、日本語話者の中でも意見が二つに分かれていた。「まーす」と伸ばされていることから、人間味や相手との距離の近さを感じて感謝の気持ちが伝わる人（JE1、JE3）もいれば、業務感で言われる印象を受けて感謝の気持ちが伝わらない人（JE2）もいた。

6)「ありがとう」と「ございます」の間に隙間があったり、「ありがとう」と「ございます」を二つに分離して発話したりすると、違和感があり、感謝の気持ちが伝わらない。

RQ3では、以下の5点がまとめられた。

1)「声の高さ」を高くする韓国人学習者（KS1、KS2、KS3）の工夫は、日本語話者も感謝の気持ちが伝わる韻律的要素の一つとして挙げていた。しかし、発話者は声の高さを高くす

る工夫を行った一方、評価する側の日本語話者には声の高さが高くないと評価される発話があった。これらは、韓国人学習者と日本語話者が持つ声の高さの基準点が異なることを示している。

2)「話速」を遅くする韓国人学習者（KS1、KS3）の工夫は、日本語話者にとっては感謝の気持ちが伝わらない韻律的要因として挙げられていた。本研究で設定された場面だと、話速を速くし、間が空かないよう詰めて発話することがより感謝の気持ちが伝わる。

3)「声の大きさ」を大きくする工夫を行った韓国人学習者（KS1、KS2）は、意図通りに日本語話者に感謝の気持ちを伝えることができた。もう一人の韓国人学習者（KS3）は、発話の後半に行けば行くほど声の大きさを小さくする工夫を行ったが、日本語話者には感謝の気持ちが伝わらないと評価を受け、伝達ができなかった韻律的特徴として挙げられた。

4）韓国人学習者（KS1）が行った「イントネーション」の幅を大きくする工夫は日本語話者に伝わらなかった。日本語話者は抑揚のある音声が感謝の気持ちがより伝わると述べ、「抑揚がある発話」の工夫としては発話者と評価者の思いが合致している。しかし、イントネーションの幅を大きくする工夫を行ったKS1の音声データは、日本語話者には抑揚がない音声として捉えられた。これらにより、韓国人学習者と日本語話者が感じるイントネーションの幅の大きさが異なることが明らかになった。

5)「ありがとう」と「ございます」の間にポーズを入れたKS1の工夫は、Praatで分析した結果、「う」の延伸であった。つまり、学習者が行ったと意識する工夫と実際の音声データとはずれがあった。しかし、日本語話者の中で、話速が遅い原因で、「ありがとう」と「ございます」の間に隙間があるように聞こえ、感謝の気持ちが伝わらなかったと評価する日本語話者（JE1）がいた。この点は、「ありがとう」と「ございます」を分離して間を空けることは、感謝の気持ちの伝達を妨げる要因となることを指している。

第6章　結論と今後の課題

第6章では、本研究のまとめと日本語教育への示唆について述べ、今後の課題についてまとめた。本研究から得られた日本語教育への示唆について、以下の3点を提示した。

1）感謝の表現の音声教育の必要性

韓国人学習者は自身なりの音声での工夫を行い感謝の気持ちを伝えたが、日本語話者には

通じなかった発話があった。こうした音声上の問題によって自身が伝えたい気持ちが伝えられないことを防ぐためには、日本語音声教育の介入が必要であると考えられる。

2）様々な場面と音声のバリエーション

本研究では、特定のコミュニケーション場面を設定したが、発話する韓国人学習者や日本語話者、評価する日本語話者から、場面の人物の当事者になって発話や評価をする様子が窺えた。日本語教育の音声研究においては、実際のコミュニケーション場面に密接したデータを得ることが、学習者の現実のコミュニケーションにおける日本語運用支援に繋がると期待される。なお、本研究で明らかになった感謝の気持ちがよく伝わる韻律的特徴や伝わらない韻律的特徴を学習者に教えることで、学習者は自身の意図通りに感謝の気持ちを伝えることが実現可能になると思われる。

3）日本語学習者の音声と日本語話者の理解

本研究によって得られた韓国人学習者における感謝の表現の韻律的特徴を参照することにより、日本語学習者と母語話者の双方の理解が深まると考えられる。

最後に、本研究の今後の課題として以下の５点を挙げた。

1)「ありがとうございます」の韓国語での発話上の音声での工夫

2）日本語話者や韓国語以外の言語を母語とする日本語学習者の発話「ありがとうございます」を対象とした聴覚印象の調査

3）対面の場面や丁寧な場面での感謝の表現の韻律的特徴

4)「ありがとうございます」の「まーす」に関する認識や「ありがとうございます」の語尾「す」の有声化および延伸に関する認識についての詳細な把握

5)「ありがとうございます」に限定せず、広く「です/ます体」を視野に入れた調査

参考文献

前川喜久雄･北川智利(2002)「音声はパラ言語情報をいかに伝えるか」『認知科学』9(1), pp.46-66

Fujisaki, H. (1997). Prosody, models, and spontaneous speech. In Computing prosody: Computational models for processing spontaneous speech (pp.27-42). New York, NY: Springer US.